

#### 牧師室から (2021.4.4)

先週に引き続き、植物の話である。現代は遺伝子工学が花盛りだが、元はといえば、ある意味、19世紀のメンデル（かつて学校の生物の授業で習ったことがあるかもしれないが）の研究に遡るとも言える。彼は司祭でもあり、修道院の庭にエンドウ豆を植えて、皺々のものをつるつるのものを一粒ずつ数え分けながら、それらを何世代にもわたって育てることを繰り返した。そして所謂メンデルの法則なるものを発見したのだ。思いをはせるに本当に悠長な話であるが、これが今日の遺伝子工学の始まりとも言える。私が想像するには、彼は聖職者であったので、研究に使った残りの豆は無駄にしないで、そのまま捨てることはせずに食べたに違いない。勿論豆ご飯などではなく、おそらくスープに入れたのではないかと思っている。

私も先程（1日午後）、牧師館の裏庭に枝豆の種を蒔いたが、これは研究目的という訳ではない。夏の食の楽しみのためである。収穫が待ち遠しい。

小さな種が土の中に入り、死んだようなところから芽が出始め、大きくなって多くの実を結ぶ。「一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ。」（ヨハネ 12:24）とおっしゃった主のみ言葉を思い出した。

この一つの豆粒の中にも、多くの新しい命を想起させる神様のみ声が聴こえる。

（鈴木淳一牧師）